東京医療保健大学学報

こころ

THCU Chronicle Heart No.31 Spring 2021

第31号

女子バスケットボール部が大学日本一 4連覇の栄誉！

本学女子バスケットボール部は、第72回全日本大学バスケットボール選手権大会（以下「インカレ」）にて、12月7日からの連戦に勝利。4年連続4回目の優勝を果たし、「大学日本一」の栄誉を勝ち取りました。

新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴い、練習環境や試合形式など状況が例年と全く違う中で厳しい練習に取り組んできた今年度、秋の関東大学女子バスケットボールリーグ戦では準優勝でしたが、その悔しさをバネにインカレに挑みました。連日強豪校との厳しい戦いを勝ち抜き、12月12日の決勝ではリーグ戦優勝校の白鷗大学と対戦し、見事勝利することができました。

今回の大会はコロナ禍の中、無観客で行われ応援はベンチスタッフのみでしたが、全体練習ができない期間、恩塚監督による映像分析やオンライン勉強会により、個人及びチームの能力が高まり、その能力を最大限コートで発揮できたことで、今回の優勝に繋げることができました。皆さまの応援に心より感謝申し上げます。

CONTENTS

2 特集
・学長退任のご挨拶
・COVID-19対策本部より

4 各学部・学科等の取組み
医療保健学部／東が丘看護学部
立川看護学部／千葉看護学部
和歌山看護学部／和歌山看護学研究科
医療保健学研究科／看護学研究科
助産学専攻科

13 各センターの取組み

15 東京医療保健大学 同窓会

16 Topics

学長退任のご挨拶

学長８年間を振り返って

今年３月末で私の学長職は任期が満了し、後を亀山周二先生に引き継いで頂くことになり安堵いたしております。この８年間、寛容と温かい人間性を持った人材の育成を目指し、理事長を初めとする大学関係者の皆様にご指導を賜りながら、また、後援会や教職員、学生の皆さんの温かい支援を背中に感じながら、この日を迎えることが出来ました。誠にありがとうございました。

就任後間も無い頃から、和歌山看護学部設置の話が断続的にあり、その後、千葉看護学部設置の話も持ち上がりました。その大事業に夢をもって協力する機会を得、2018年にこれら二学部が同時にスタートした瞬間を体験できました。来年３月には両学部とも一期生が卒業を迎えます。両キャンパスには大学院も整いました。医療保健学部と東が丘・立川看護学部の時代から各学科の教授会に年２回ずつ出席し、学長の思いを直接伝えるようにして参りましたが、これを千葉、和歌山にも広げることができました。

規模の拡大に伴い本学の社会的責任が益々大きくなることが予想されましたので、2015年頃から本学の将来像を「大学ビジョン」としてしっかり描き、全学一体となってその目標・未来像に向けて進む必要があると考え始めました。実際に「学長室プロジェクトチーム」を立ち上げ、「大学ビジョン」作りに着手したのが2017年２月で、有能な若手メンバーが揃っていたこともあり、その年の内に「大学ビジョン」がまとまり、それを達成するための「アクションプラン」も各学科・部署から競い合うように次々と提案されてきて、本学の教職員のパワーと可能性を感じました。

学長室PT（Project Team）メンバーとの記念写真

2018年には大学基準協会による「大学認証評価」がありましたが、大学の過去・現在・未来を正確に把握しておかなければならず、良い勉強になりました。「大学ビジョン」の作成など多くの実績は好意的に受け取って頂けましたが、「内部質保証」の体制を充実するようにとの指摘を頂きましたので、在任中に改善案を仕上げようと馬場事務局長と頑張っています。

2019年末に中国武漢で始まったCOVID-19の大流行も忘れることのできない思い出です。私は感染症や感染制御を専門としてきましたので、2020年２月中旬、日本環境感染学会に出席するため横浜におり、停泊中のダイヤモンドプリンセス号を目の当たりにしました。当時、船内の感染者は既に280名程度に膨らんでいましたが、3,000人を超える乗員・乗客をずっと船内に留めると言う、理解できない無謀な政府の対応で最終的に感染者は712人にも達しました。

2020年３月には国内での新規感染が少ないながら持続してきましたので、急遽、本学に「新型コロナウイルス感染症対策本部」を立ち上げ、授業や卒業式、入学式等での感染対策の方針を検討しました。４月の新入生オリエンテーションは学生にPCを渡し操作法を説明したところで打ち切り、際どいタイミングで７日の「緊急事態宣言」発出に間に合わせました。入学式を行ってあげられなかったことが心残りです。

従来から全学生にPCを貸与していたことが幸いし、どの学年でも遠隔授業や遠隔・対面ハイブリッド授業でやり繰りできましたが、学内でのクラスター発生が無かったのは学生や教職員の皆さんの努力と協力の賜物と感謝しています。また、女子バスケットボール部はインカレ４連覇の快挙を成し遂げました。私の８年間の中での４連覇で、一人の感染者も出さずよく頑張ってくれました。これも嬉しい思い出です。

2021年２月からワクチン接種が始まりました。曲折はありそうですが接種が進めばCOVID-19も次第に鎮静化され、これまでの苦労も懐かしい思い出となることでしょう。

亀山新学長のもと、本学が益々発展して行くことを願ってやみません。

東京医療保健大学
学長　木村 哲（きむら さとし）

Profile

木村 哲（Satoshi Kimura）

1967年東京大学医学部卒業。医師/医学博士。専門は、内科学、感染症学、感染制御学、HIV感染症。専門領域の活動では、複数の学会で理事長を歴任（日本内科学会、日本感染症学会、日本エイズ学会、日本環境感染学会等）。2006年４月～2013年３月まで東京逓信病院にて院長を務め、2013年４月に東京医療保健大学学長に就任。就任後は、学部・研究科・センターの新設が進み、日本最大規模の医療系大学へと発展。新型コロナウイルス感染症の流行が始まってからは、感染症学の専門家として学内外への情報発信に努めた。2013年瑞宝中綬章受章。

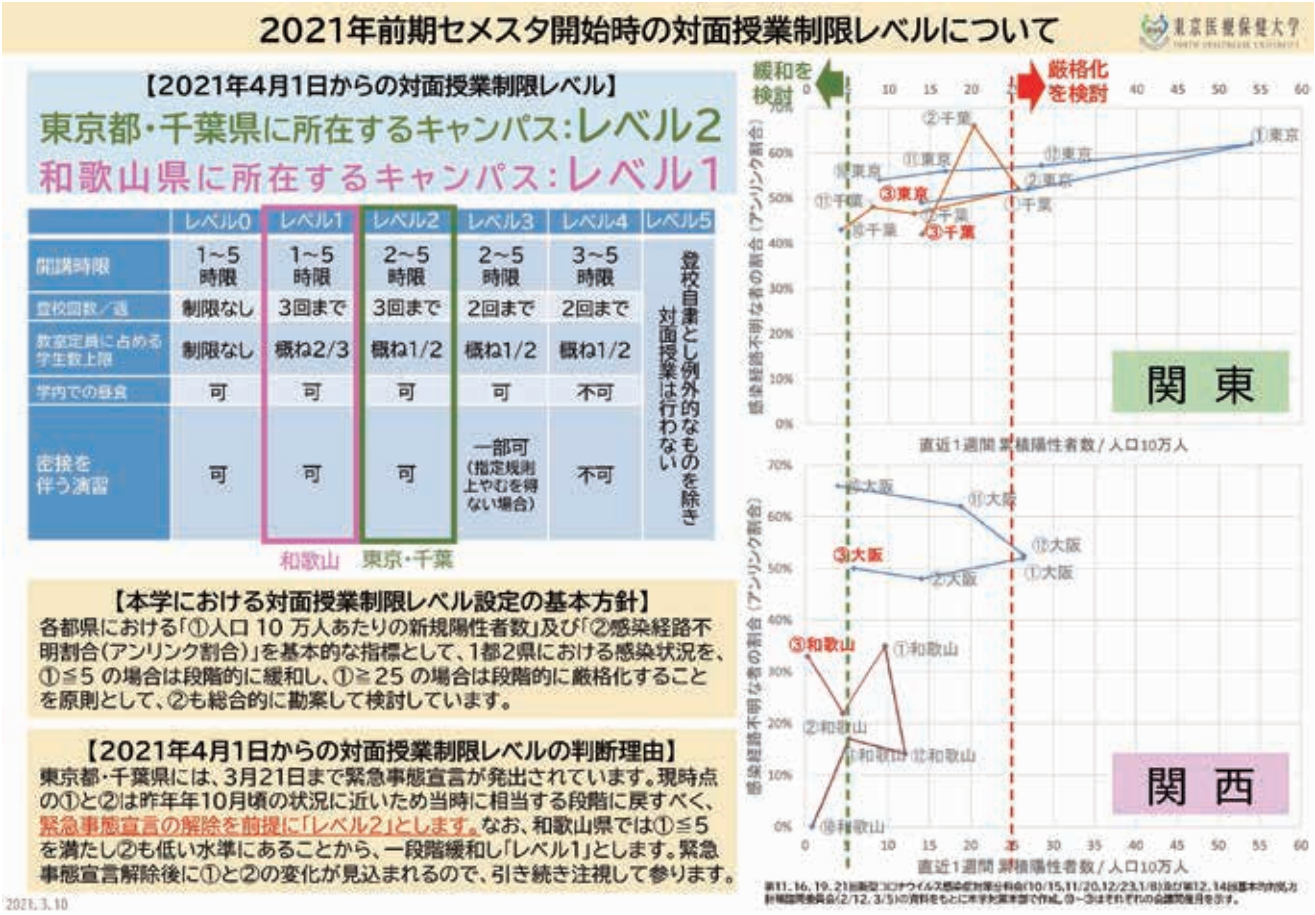
「新しい生活様式」における最適な学修スタイルの確立に向けて

このほど本学では、４月１日時点の対面授業制限レベルを発表いたしました。東京都・千葉県のキャンパスでは週３回で２～５時限に授業を行う「レベル２」、和歌山県では週３回で１～５時限に授業を行う「レベル１」といたしました。このレベルの決定にあたっては、各都県の「人口10万人あたり陽性者数／週」や「感染経路不明の割合（アンリンク割合）」を基準にしています。３月10日時点では東京都・千葉県の状況が昨秋の状況に戻っていること、和歌山県ではさらに低い状況にあることを踏まえ、これらのレベルを決定いたしました。ウィズコロナの社会では、感染拡大状況の増減は避けられません。そこで本学では、感染状況が一段落しているときには対面授業を積極的に行い、感染拡大が深刻なときには遠隔授業を中心とした授業構成にすることで、充実した学修環境の維持・向上に努めてまいりたいと存じます。

オンライン学修については、学生の皆さんも教職員も少しずつ慣れてきたのが現状です。その中で特徴的なものの一つに、「バーチャルシミュレーター」という教材があります。これは画面上で患者に質問したり、あるいは計測を行ったりすることで情報収集を重ね、その上でどのような介入を行うのか判断するプロセスを学べるツールです。介入を行うとそれに応じて患者の状態も変化していき、最後に振り返りができる構成になっています。生命に関わることだからこそシミュレーターで繰り返し学ぶという学修手法は、航空業界などで既に定着しています。近年では医療分野のシミュレーターが急速に発達し、高い学修効果があることも論文などで明らかにされています。もちろん病院など医療現場に行って実際の援助対象者と会話することも大切な学修です。このような多様な学修方法は優劣をつける性質のものではなく、それぞれの学修方法が持つ長所を、カリキュラムの中で組み合わせていくことが重要です。

さて、このほど本学は文部科学省から「デジタルを活用した大学・高専教育高度化プラン」の実施機関に選定されました。全国で252件の応募があり、その中で本学を含む54件が採択されました。本学で行う取組は「学修過程・成果の可視化を目的とした医療系の学びにおけるDX推進」と題し、学生の皆さんが「何を学び、何を獲得したのか」を実感できるよう学修管理システム（LMS：Learning Management System）の充実などを図って参ります。ハイブリッド授業によってより充実した学修スタイルが確立するよう、今後も研鑽に努めてまいりますのでご支援の程よろしくお願いいたします。

新型コロナウイルス対策本部／学修基盤推進室
医療保健学部　医療情報学科　教授　瀬戸 僚馬（せとりょうま）



対面授業レベル

第４回日本ヘルスケアダイバーシティ学会 開催報告

2020年９月26日、第４回日本ヘルスケアダイバーシティ学会が開催されました。同学会は本学の坂本すが副学長を大会長、大学院医療保健学研究科看護マネジメント学領域の教員を中心に事務局を組織し、企画・運営に関わったため、ここに報告いたします。

まず特筆すべきは、会場（東京都看護協会会館）とwebのハイブリッド開催であったことです。この時期、同様の形式で開催される学会等がちらほら見られ始めましたが、関係者のだれも経験していない試みであり、その方法が実現可能なのか、そもそもコロナ禍で人が集まるのか、何もかも予測できない状況でした。５月連休明け、１回目の緊急事態宣言解除後、「できるやり方でやりましょう」。そこは大会長の一声で軽く乗り越えたものの、準備は手探り。講師、参加者から運営スタッフまですべての感染対策を徹底し、会場定員を抑える一方でweb参加者を募り、当初予定の約400名の参加を得て開催に至りました。

次に学会テーマ「ダイバーシティええよぉ―多様性を価値にするマネジメント」のもと、看護職に限らず多職種・多業種および外国人を含む多様な講師の先生方の参画が叶ったことは学会を大きく盛り上げたと思います。人種や言語が多様ではない日本で、ダイバーシティってなんだろう。ダイバーシティを組織に取り入れ活かすとはどういうことなのか。これらの問いに対し、新聞記者が見てきた一般企業の失敗例や、企業初の女性管理職経験者による女性活躍がなぜ進まないのかという話は大変新鮮で、ヘルスケア領域においても共感でき学びのある内容でした。

特に女性の働き方は育児や介護の問題に目が行きがちですが、目に見えない、その人の考え方や価値観を知り、それを仕事にどう活かすかも、今、看護管理者にとって重要で悩ましい課題です。学会では、人口減少に転じる社会で多様な人と共に働く必然に向かって、あらゆる活路が見いだせることが豊富な事例をもって語られたように思います。

紙幅の都合で全容をお伝えすることはできませんが、興味のある方はホームページ（https://plaza.umin.ac.jp/~jhcd4/）を閲覧ください。

助教　本谷（もとたに） 園子（そのこ）

感染対策を徹底し会場とwebのハイブリッド開催となった

基礎看護学領域での講義・演習・実習をつなぐハイブリット型授業

基礎看護学領域では、対象の理解とアセスメント、根拠に基づき実践する能力を大切にしております。また、現代社会に求められる看護実践能力について生涯学習できるように全科目に「ICTを活用した授業」を導入しております。

導入の目的は、AI・IoT・ICT・ビックデータ等による科学技術の進歩の影響を受けた医療情報・医療機器・医療制度・医療体制・医療の提供方法や手段（保健・医療・福祉システム）に対応できること、看護専門職として多職種連携できるための情報活用能力を身に着けることです。また、予測困難な時代といわれる現代社会において、対象の情報活用能力に応じた看護実践（健康教育・情報発信・情報伝達など）を情報モラルに則り実施できること、情報活用能力を基盤とした看護専門職としての生涯学習や自己開発力、学習管理ができることを目的としております。

そのため、Webclass（学習管理システム）を活用し、看護への興味・関心を高めながら段階的・継続的な情報活用・学習管理・自己開発・生涯学習の能力を養います。また、様々な動画教材（Nursing skills, Nursing channel, VR教材）を活用することで、実際の医療現場での看護実践を想起しながら知識・技術・態度の習得を目指します。教育用電子カルテMedi-EYEでは、看護の視点から必要となるデータを収集するために、記載場所を見つけ出し、データを取捨選択、情報として収集するという学習を促します。臨床判断を磨くためのバーチャルシミュレーションvSimでは、講義・技術演習・タスクトレーニングでの学習を統合させ、対象の場面や状況に応じた思考のプロセスを学び、臨地実習での実践を目指します。シミュレーション演習では、実際の患者に提供する看護場面を設定し、看護実践と振り返りを繰り返すことで学生自身が行動の意味や裏付けを意識的に考え、知識・技能、思考・判断・表現、主体的な学びの獲得を大切にしております。

基礎看護学領域では、生涯学習を継続できる学生を育成するための教育方法を今後も検討し続けていきます。

基礎看護学領域　准教授　西村（にしむら） 礼子（あやこ）

ICTを活用したシミュレーション演習の様子

古代食復元シンポジウム

「シンポジウム　古代食の総合的復元と疾病との関係解明―古代の食の復元から疾病の関係までに迫る―」は、9月13日にオンライン形式で開催されました。オンライン形式が幸いし海外（シンガポール）や京都府、山口県の研究者もふくめ約40名の研究者に参加いただくことが出来ました。現在、その成果をまとめて、吉川弘文館から出版する作業に入っています。この本には、本学の先生や奈良文化財研究所などの研究者、さらに三舟ゼミ生が関わった科研費基盤B「古代食の総合的復元による食生活と疾病の関係解明」（課題番号：17H02393、研究代表者：三舟隆之）の論文や研究報告も掲載される予定です。

また科研費基盤A「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」（課題番号：20H00033、研究代表者：三舟隆之）に関連する研究として、古代の炊飯法の再現を西念幸江先生の指導の下で行っています。NHK番組『日本人のおなまえっ』において、奈良県の「米虫」さんというお名前の由来が実は「米蒸し」からであったという内容を映像化するために、NHKから古代の炊飯法の再現を依頼され、モデル土器を使いながら再現実験を行ったところが紹介されました（昨年11月5日放映）。

現代の炊飯法は「炊き干し法」といい、米を釜の中で炊き上げる方式ですが、弥生時代に伝わった古代の炊飯法は「湯取り法」という米を煮てある段階で中のお湯を捨てて蒸らすという炊飯法でした。これは現在も東南アジアで行われている炊飯法です。ところが古墳時代後期になると、朝鮮半島から米を「蒸す」炊飯法が入ってきて普及します。しかし、モチ米ではなくうるち米を蒸すと米の芯まで加熱されないので、ボソボソの食感の炊飯になってしまいます。どうしてこの米を「蒸す」方式に変わったのか、未だに食文化史や考古学でも結論が出ていません。科研費基盤Aは、東ユーラシアという観点から炊飯法の変化を研究することが目的です。

現在、コロナウィルスの影響で海外・国内とも調査が出来ていない状況ですが、終熄後には研究活動を再開して、古代の炊飯法の変化を解明したいと考えています。

教授　三舟（みふね） 隆之（たかゆき）

【写真】左から
NHK「日本人のおなまえっ！」撮影の様子
古代の炊飯実験で使用したモデル土器
古代の炊飯方法により炊き上がったお米

遠隔授業と対面授業の併用による給食経営管理論実習の工夫

2020年度の給食経営管理論実習は、新型コロナウィルスの影響により、本来対面で行われていた実験・実習が、遠隔授業と対面授業の併用によって行われています。従来、実験・実習は、LIVEで実物を見せたり、触らせたり、使用させたり、様々な体験や経験により、学生個人で考えたりグループで検討・ディスカッションすることで修得できる科目です。したがって、これまで通り対面でできないことに、私たち教員だけでなく学生達にも戸惑いと不安が非常にありました。また、給食経営管理論実習は、学校や病院などの特定給食施設の給食提供に直結する実習であるため、それらを想定して例年は学内の模擬厨房で学生自らが計画した100人分の給食を調理し、教職員や学生に提供、喫食していただいていました。しかし、今年度は、対面実習の回数制限や100食を調理しても喫食者が確保できないことから40食にとどめ、さらに、学生達は連続した2日間のうち1度しか模擬厨房内での実習ができない状況となってしまいました。

この2日間の対面実習のための準備・指導は、オンデマンドとオンライン授業を併用し課題の添削や補足は、LMSやメールなどにより行いました。オンデマンド授業では、模擬厨房内や大型調理機器・什器の説明、使用方法などを録画し、いつでも視聴できるようにしました。オンライン授業では、学生20名をZoomでつなぎ、オンデマンド授業の補足や実物の調理機器・什器を見せながらの説明、ブレイクアウトルームを活用した実習グループごとのディスカッションの時間を設けるなど工夫をしました。

対面実習は、約10名のグループごとに実施し、どのグループも慣れない模擬厨房で奮闘しながら、40人分の給食を何とか無事に提供できました。

学生からは、「1回では足りない、もっと実習をしたい」との意見が多く、課題は残りました。しかし、これまでの問題点であった授業時間外の準備や給食実習前日から当日の終了までに費やされていた多くの時間の見直しをすることができました。今後、この状況が急激に変わることはないと予想されるため、今年度の経験から遠隔と対面の併用による実習授業を模索していきたいと考えています。

講師　酒井（さかい） 理恵（りえ）

給食経営管理論実習の様子

2020年度 医療情報学科　卒業研究&ゼミ　合同発表会

医療情報学科では2021年１月18日、卒業研究と医療情報ゼミの発表会を合同で実施しました。データ分析や文献調査、デバイス開発、ゲームやアプリ製作など多種多様な成果が発表され、活発な議論が行われました。以下に演題の一覧を紹介します。また、併せて11月に今泉ゼミが参加した「インカレオンラインイベント」についてご紹介いたします（後段）。

卒業研究 - 発表題目一覧

・公開された都道府県データに見る経済活動と医療サービスの関係（武田 康汰、指導教官：比江島欣愼）
・会話をスムーズに進めるための視線とジェスチャー
　―直接会話・間接会話の場面における差を対象とした映像分析による比較検討―（二神 彩音、指導教官：駒崎俊剛）

医療情報ゼミ - 発表題目一覧

●深澤ゼミ
・全国病院情報データベースの構築
・販売実績データの分析
・スタッツ管理システムの開発

●比江島ゼミ
・生活習慣病と飲酒、喫煙との関係について
・COVID-19の感染拡大防止対策の経過と感染状況
・COVID-19と大気汚染の関係
・COVID-19と超過死亡の関係

●今泉ゼミ
・生体信号を用いたゲームの製作

●瀬戸ゼミ
・疾病退散における「安倍晴明」の影響
・疾病退散における「茅の輪」の影響
・天平のパンデミックと新型コロナウイルス感染症流行における人々の動向について
・感染症と「疫病退散祈願」に対する大学生の認識

●柴野ゼミ
・各種清涼飲料水による酸蝕能の比較

●駒崎ゼミ
・流動性記憶に焦点を当てた高齢者向けのゲーム開発
・食器IoTの未来～医療・介護情報における活用実験～

●金澤ゼミ
・スマートフォン向け健康管理アプリケーションの開発
・オンラインDTPシステムを用いたパンフレットの制作
・ARマーカーを用いた物品管理アプリケーションの開発

オンラインによる大学・専門を融合した学びあい～インカレオンラインゼミイベント

３年次の医療情報ゼミの一環として、インカレオンラインイベント「Beyond ～ニューノーマル時代のWell-beingを創造する」を共同開催しました。本イベントは、Facebook上の「新型コロナのインパクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ」で賛同者を募り、５大学のゼミで共同開催することとしました。

参加したのは本学の他、関西学院大学、目白大学、城西大学、東北福祉大学で、８月末から学生中心にオンラインで打ち合わせを重ね、11月29日の当日まで大学の垣根を越えて実施しました。

私の医療情報ゼミでは、それまでに学んだ知識や技術を活かしてヘルスケアに関する社会課題に取り組むことを意識しています。例年、学科内でのゼミ発表会を一つのゴールとして、基本技術の習得、論文抄読によるテーマの検討を行い、各自の興味に合わせてアプリ開発や生体計測を行っています。

今回、オンラインイベントに参加したのは、学生が今後活躍するであろうニューノーマルの時代のあり方を、日常とは違う多様な価値観を持つ他大学の学生とともに学んで欲しいという願いからです。

具体的なプロジェクトのテーマは、前期の論文抄読で学んだ「聴覚障がいを持つ方と一緒に楽しむゲーム」をヒントに、筋電信号を用いたゲーム制作をすることにしました。身体を動かすことで得られる信号をスイッチにすることで、リハビリテーションや運動支援、エンターテイメントなど多様な広がりと発展があると期待しています。

オンラインで会ったことのない人々とイベントを企画・運営し、画面の向こう側に向かって発表するという試みはいささか冒険だったかもしれません。ただ、その分、緊張感のある刺激的な経験ができ、学生が自らの可能性を感じてくれたと考えています。

当日の様子はYouTubeで公開中です。「インカレオンラインイベント」で検索してください。

教授　今泉 一哉

URL：https://www. youtube. com/watch?v=qPmQSJPuiMU

東が丘・立川看護学部 臨床看護学コース 卒業研究発表会

3年次の11月からスタートした卒業研究の発表会が11月9日に行われました。4年次生93名が全12領域に分かれ、テーマの研究成果を発表しました。また、早期体験を通し、次年度の自身のゼミナールや卒業研究テーマの選定のための情報収集の機会として3年次生104名も参加しました。

今年度は新型コロナウイルス感染症予防のため、例年発表会が行われていた教室から国立病院機構本部講堂へと会場を移して参加者のディスタンスを保ち、会場の換気を可能な限り行い学会形式で行われました。卒業研究は、アンケート調査による観察研究から、文献研究や実験研究に至るまでその方法も様々でどの領域の学生も研究成果を首尾よく自信を持って発表していました。持ち時間内で時間管理も徹底し発表していたことからも、しっかり発表練習をしてきたことがうかがえました。そして、学生同士での質疑応答も活発に行われ、有意義な意見交換ができました。

4年次生が卒業研究過程と本発表会での経験と学びを糧とし、臨床現場においても積極的に研究参加してもらえれば、指導に当たった先生方の喜びも一入であると思います。昨年、筆者が参加した看護の国際会議では、他大学の看護学生や新人看護師が卒業研究の内容を発表していました。本学の卒業生も卒業研究の成果を関連学会で発表していますが、今後は国内に留まらず海外でも発表する方が出てくればいいなと思います。そして、来年は4年次生の立派な姿を追いかけて、3年次生が後に続き良い研究活動に取り組んでいただけることを願っています。

総合看護学領域　講師　浦中 桂一（うらなか けいいち）

各領域最大3名で発表を行いました

活発な質疑応答になりました

コロナ禍の今だからこそ、看護学生として地域の役に立つ活動を！

新型コロナウイルス感染者数の増加により、経済的に困窮する家庭の子どもが増えています。このような子ども達の支援を目的として、地域住民や商店街、近隣大学が連携し、「コロナ禍でも、すべての子ども達にいつものクリスマスを」を合言葉に、チャリティイベント「三茶にサンタがやってくる！ 2020」が2020年12月13日（日）に東京都世田谷区三軒茶屋で開催されました。

「コロナ禍の今だからこそ、私たち看護系大学は地域の役に立つ活動をしよう！」という考えをもとに、本学からは臨床看護学コース（東が丘）の学生8名と教員5名がボランティアとして参加しました。

学生達は、ワークショップ参加受付時の検温や手指消毒等の感染予防対策、子ども達へ正しい手指消毒方法の指導と確認、救護班といった役割を担いました。イベントはサンタクロースに会うことを楽しみに来場した子ども達で大盛況であり、学生達による感染予防対策は、イベントを安全に進行する上で非常に重要な役割を果たしました。学生達は、子ども達に優しく語りかけながら、子ども達の目線に合わせ、検温や正しい手指消毒方法の指導や確認などを行いました。

学生達の活動に対し、運営スタッフから「コロナ禍の中、看護師を目指す学生が地域イベントの感染予防に参加してくれることをとても頼もしく感じます」との言葉をいただきました。感染予防対策を目的として、本学学生がボランティアとして地域のイベントに参加するのは今回が初めてのチャレンジでした。入場者の動線管理、他大学の学生との連携や交流が不十分であったなどの反省点はありましたが、今後の地域貢献活動への参画にむけた良いスタートを切ることができました。

活動後、学生達は「COVID-19が流行する中、子どもが好きなXmasイベントにおいて感染予防に取り組めたことは、看護学生としてとても有意義だった」と伝えてくれました。今回の活動は、本学ビジョンの一つである「地域と連携・共生し、社会に貢献」を学生達が実践してくれたと考えております。地域と共にある看護系大学の役割として、地域の皆様の健康の維持・増進と学生の学びのために、今後も学生と教員が一体となって活動を進めたいと思います。

看護基盤学領域

正確な体温測定と万全の感染予防により入場者の健康を管理

正しい手指消毒の方法を子ども達へ解りやすく指導する風景

地域住民の「こころの健康づくり」のためにできること

2020年11月21日(土)に立川市と共催の公開講座「うつを知ってこころの健康づくり～自分のこころと対話していますか？～」を開催しました。

本講座では、「うつ」について理解を深めていただく機会として、ストレス社会の現状やうつ病の症状、対処方法などを説明しました。また、自身のこころの健康を保つ方法として、自己理解・自己受容について解説し、受講者にチェックリストを用いて実際に体験していただきました。

生憎、新型コロナウイルスの感染者数が増加している中での開催となりましたが、ご自身やご家族、身近な方のこころの健康へ興味をお持ちの方にご来場頂き、多くの立川市民を含め30名以上の方に参加していただきました。

今後も地域の健康づくりへ積極的に貢献していくと共に、地域から信頼されるNurseの育成に努めてまいりたいと思います。

講座中の様子(感染防止対策を徹底して実施)

精神看護学領域　准教授　田野 将尊

第40回日本看護科学学会学術集会（交流集会）参加について

2020年12月12日-13日に開催されました第40回日本看護科学学会（Web開催）に交流集会で参加しました。交流集会のテーマは「看護学臨地実習における実習指導者と大学教員の連携を目指した取り組み－実習指導者・大学教員・学生の３者の立場から－」というタイトルで、本学の実習検討委員会委員、主な実習施設の国立病院機構災害医療センター、国立病院機構村山医療センター、国家公務員共済組合連合会立川病院の指導者の方々と本学の４年生と共同で発表を行いました。発表内容は本学と実習病院が実習指導の質向上を目的として共同開催している「看護学実習連携会議」の取り組みの紹介と学生の立場から見た実習指導の実際と教員や指導者に望む実習指導を報告しました。交流集会当日（LIVE）は通常は学会会場で交流集会を実施するのですが、今回はWeb開催ということで、会場は立川看護学部の校舎で行い、オンラインは主催者側がホストとなり開催しました。日本各地の学会員約60名にご参加いただき、参加者からの質疑応答や指導者と学生で討議を行いました。短時間ではありましたが、非常に有意義な交流集会となり、交流集会後のアンケート結果では「立場は違えど同じ看護を志すものとしてよい関係で実習できることを目指すべきだと改めて感じました」「施設と学校がうまく連携できていて、羨ましく感じました。私達もさらに頑張ろうと勇気をもらうことができました」「実習指導に直接関わっておられる現場の方と学生との交流ができたことがよかったと思います。学生にとっては臨床で実習受け入れに関して直接企画に携わっておられる方との交流は貴重な機会ではなかったと思っております」などのご意見を頂きました。

実習施設と共同で学会に参加したことを通じて、改めて連携を図ることの重要性を双方で実感することができました。今後も実習施設とより一層の連携を図り、大学と実習施設で一貫した実習指導ができるよう探求していく予定です。

交流集会参加者と記念撮影

実習検討委員会委員長　藤村 朗子

専門的技能と知識習得からの目覚め

対象となる人のことばと表情、そして体表面から視て、触れて、聴いて身体の声を聴く。フィジカル・アセスメントを学ぶことは、看護師を目指す者にとっては必要不可欠です。耳と目と手で肝臓や心臓の大きさが解り、正常の扁桃腺や甲状腺の大きさを知ることで異常が判断できます。学生はお互いに確認しながら知識を習得しています。そこに、患者さんに安全・安心を約束できる看護師に成長するための基本があり、医師が安心して患者を任せられる観察力を持ち合わせた看護師が誕生すると考え、日々演習を行っています。

病気を診てもらう立場から、観る側へのシフトチェンジ、人の役に立ちたいと本学に入学してきた学生にとっては、専門的知識の習得は、学ぶ喜びとなり、自ら成長していく原動力と成ると考えています。分かる➡楽しい➡役立つ➡更なる知識へと繋がることを期待し教授しています。

フィジカルアセスメント演習の様子

基礎看護学領域　准教授　岩満 裕子

対面授業における感染予防対策について

緊急事態宣言解除後、対面授業のある日は、授業開始の40分前から授業開始まで、サーモグラフィー測定場所で体調確認を行うとともに、当日朝までの体温や症状の有無を記載した「体調管理表」を活用し、体温や症状の確認の他、健康に関する相談や質問にも対応しています。日々継続して体調確認を行うことで、学生の体調や様子を把握し、個別の対応につなげています。

授業は、座席数をへらし、密接・密着を防止する配置とした座席指定としています。万が一に備え、毎回座席表を作成しております。各教室の入り口には手指消毒液を設置している他、学生がいつでも使用後の机等を消毒できるよう消毒剤とペーパータオルを配しています。

飛沫防対策としては、教卓と学生との距離を十分にとり、またアクリル板も設置しています。

体温測定をしている学生の様子

立川事務部　清水 容子
上山 淳

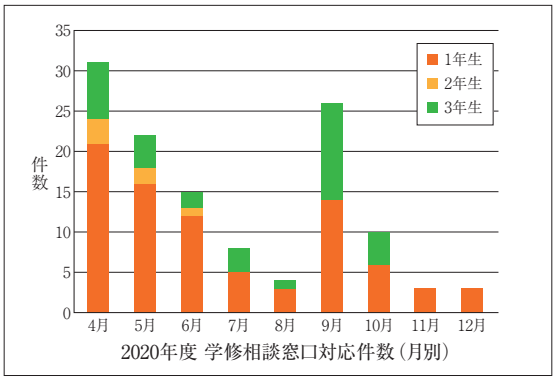
COVID－19影響下における学修支援・学修相談

千葉看護学部には、学修支援に特化した学修支援委員会があり、メールによる「学修相談窓口」を開設しています。本年度はCOVID-19感染拡大により、授業形態の急激な変化、学生間の交流が難しい環境となりました。４月以降、“授業や動画へのアクセス方法がわからない”、“課題を提出したがうまく送信できない”、“一人で受講しているとこれでよいかわからない”など、不安を背景にした相談にこの窓口が活用されました。教員全体で相談内容を分担し迅速な応答、情報周知やパソコンスキルの解説、授業改善につなげました。

対面授業やリアルタイムweb授業開始に伴い、９月に増加した相談数はすぐに減少しました。また、学生からの学修支援ニーズを直接受け止め、対応を検討していきました。図書館利用ができない中での調べ学修支援として「レポート課題への対応」、「遠隔授業における情報検索」、そして、膨らむ電子教材のファイリングに悩んでいるという声を受けて「電子データ管理の工夫」についての動画を作成し配信しました。

オンデマンドまたはリアルタイムの遠隔授業と対面授業を組み合わせたハイブリッド型で授業が行われるようになった今は、機会が減ったからこそ知ることができたグループ学修への喜びの声を多くの学生から聴くようになりました。個人で遠隔で学ぶ力と、相互交流を活かして学ぶ力を培っている学生達だからこそ、創造していける未来があると信じ、全教職員で、学修支援を続けています。

学修支援委員会　委員長　吉田 澄恵（よしだ すみえ）
副委員長　山本 由子（やまもと ゆうこ）



2020年度 学修相談窓口対応件数（月別）

電子教材ファイリング動画

基礎看護援助実習Ⅰを終えて

千葉看護学部１年生の基礎看護援助実習Ⅰが終了しました。新型コロナウイルス感染症が流行する中で、当初の予定から実習病院を２か所に絞り、３日間の臨地実習のうち12月の１日は学内実習とする計画に変更しました。

今年度の１年生は学内での演習回数も制限されていましたが、10・11月の臨地実習では実習病院のご協力のもと、入院患者様のバイタルサイン測定や清潔ケアを学生は行うことができました。学内実習では、臨地で実施した清潔ケアの自己評価を踏まえて、教員が演じた模擬患者に対し清潔ケアを実施しました。学生は、模擬患者でありながらもその個別性に即した方法を真剣に検討してケアを実施し、解剖生理学や疾患の知識が清潔ケアに必要なことを改めて実感していました。本実習は、看護技術の学び方を学習する目的もあり、学内実習でもこの目的は達成できたと考えます。

また、学生は、実習２週間前から体調および行動を記録表に記載し、感染対策に努めました。それにより、全員が臨地実習中に発熱等体調不良を起こすことなく修了することができました。今年度の実習は、未曽有の事態の中で実習を引き受けてくださった病院の皆様のご尽力あってのもので、実習終了後に改めて学生から感謝のメッセージ動画をお送りしました。今後も実習病院の皆様と協力しながら、実習の調整をしてまいります。

基盤看護学領域　安藤 瑞穂（あんどう みずほ）

学生からの感謝のメッセージ動画

学内実習の様子

和歌山看護学部　看護学科

コロナ禍における和歌山看護学部の実習について

2020年度の実習は、7月からオンラインによる地域看護活動実習、基礎看護援助実習Ⅰがスタートしました。いずれの実習におきましてもできるだけ臨地実習に近い形で実習施設の協力を得ながら実施いたしました。工夫点としましては、実習施設のイメージが掴めるよう実習指導者・地域住民等による双方向の事業説明、実習施設との共同で作成した映像、模擬事例等を用いたグループワーク、カンファレンスへの実習指導者の参加などによって、実習目的・目標の達成に努めました。オンライン実習では、すべての学生に同じ情報を提供し、学びの公平性が担保できたと考えます。

【領域実習施設の受け入れ中止に伴う対応と実習施設の継続】

領域別実習は、10月5日から臨地実習としてスタートしましたが、日本赤十字社和歌山医療センターにおけるCOVID-19感染患者の受け入れが増加したことに伴い、11月中旬から実習受入れが中止となりました。臨地実習の代替えとして、急遽、学内実習とオンライン実習の組み合わせにより領域毎に実習の目的・目標に合わせた工夫を凝らして対応しているところです。

【学部内における実習状況の共有】

昨年12月末には、学部内FD・SD委員会の企画で、領域別実習の進捗状況と工夫点についてオンライン研修会が開催され、教職員全体で実習内容を共有する機会が持たれました。電子カルテ等の活用による看護過程の展開やvSimの活用、実習教室配置の工夫（成人看護学領域では、体育館やカフェテラスを活用した演習等）が行われています。老年看護学実習では、施設内の動画等の活用、母性看護学実習では、妊婦さんとの交流、助産所実習の追加、ビデオ学習など、精神看護学実習では当事者へのインタビューが実習施設配置の工夫など、各領域の取り組みや工夫の実際を共有できたことで、更なる実習での学びの質の向上が期待できます。

【今後の実習施設受け入れの見通しについて】

一部の医療機関、保育所、助産院、訪問看護ステーションでの実習受け入れが継続していますが、2021年に入り和歌山県内のCOVID-19感染者が急増していることから、今後はさらに実習施設での実習が厳しいものであるといえます。

いずれにしましても、実習における学生の学びの質を担保できるよう工夫と研鑽を重ねてまいりたいと思いますので、どうか宜しくお願いいたします。

教授　原（はら） 政代（まさよ）

「認知症高齢者からの情報収集場面」
看護師役の学生が、認知症の模擬患者とのコミュニケーションを通して、看護に必要な情報を収集

大学院　和歌山看護学研究科

Zoomを用いたミシガン大学Denise先生の講義

和歌山看護学研究科は2020年4月に設立され、現在はM1の12名のみとなっています。院生の皆さんは和歌山の看護の発展のために、とても期待されています。

この度、修士課程の講義の一環として、ミシガン大学看護学部のDenise M. Saint Arnault, PhD, RN, FAANより、「研究方法論ミックスメソッド」についての講義を行っていただきました。彼女は文化と健康の関連性をみることが必要であるとし、「The Cultural Determinants of Help Seeking」を提唱し、ミックスメソッドを用いて様々な国で検証を重ねています。

今回の講義の時間設定は、日本時間の20時～21時半、ミシガン時間は6時からとなりました。Zoomを用いることのメリットを痛感し、早朝にも関わらず快く引き受けていただくことができたことを感謝しています。大学院生を含めて30名に参加いただきました。

講義では、質的データと量的データの両方を収集・分析し、結果を統合して1つの研究にまとめること、質的研究の結果と量的研究の結果を研究過程（データ収集時・分析時・解釈の段階）のいくつかの段階で統合することなどを、例を用いて説明していただきました。また、質的データの度数または出現数を計測し、量的データセットにインポートする具体例なども示して説明していただきました。これらは、理論的枠組みを用いる方が効果的であるそうです。スライド資料は日本語版でしたが、英語での講義は難しかったのではと思います。

Denise先生

大学院生の感想は、「インターネットで海外の先生から講義を受けられたことは、とても貴重な体験になりました。アカデミックな講義を受けることができ、とても貴重な経験ができました。世界の考え方や新しい知見などグローバルな視野を持つと、違った視点からの解決策にも繋がると感じました。デニス先生の言葉や表情から熱い思いが直接伝わってきて、とても感動しました。デニス先生が力強く、既存ではない新しい世界観を学問分野に結び付いた方法で、と話されたことが特に心に残りました。」等、ポジティブな考えで受講いただき、この様な機会を作ることの必要性を再確認いたしました。

今後、院生の皆さんは研究計画を立案し、データ収集、分析、中間発表会、修士論文執筆に取り組んでいかれます。悩むことも多いかと推されますが、きっと有意義な時間を過ごされているだろうということが伝わってくる皆さんたちです。

今後の研究に期待致します。

教授　畑下（はたした） 博世（ひろよ）

COVID－19（新型コロナウイルス感染症）と共に

「やっと、会えたね。なんだかみんな小さいね？」

12月中旬、初めての対面授業でやっと顔を合わすことができました。第１印象の驚きはZoomで会うより、みんな小さかったこと。新しい発見でした。

入学後より、オンライン授業にて学んできました。当初は、配信される課題に取り組み、相談することもできず「自分の理解は正しいのだろうか？この課題は間違っていないだろうか？」そんな不安と闘っていました。しかし、Zoomでの授業が始まり仲間ができると、その不安は解消され、疑問や学びの共有ができるようになりました。もちろんネット上で。

看護実践開発学領域では、日頃の実践を掘り下げそこから学ぶことが多く、自分達が何気なく行っている看護ケアの意味や、患者とのやり取り一つ一つの意味を改めて考える機会となります。しかし、その工程は病院での日常とは別世界で、先生の求めている答えにたどり着けず、無知、不甲斐なさを思い知り落ち込むこともありました。言葉が思いつかず、思うように表現できないため悲しくなるのです。頭を抱え、出るのはため息ばかりで自分自身にイラついていました。それは、学習に対してだけではなく、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）対応に追われていたからなのかもしれない。私達はCOVID-19最前線で患者対応を行う大変さや辛さについて共有していました。さらには医療者に対する心無い言葉にも直接触れ、私は怒りや不信感に蝕まれていました。そんな中、授業中に看護学生の応援メッセージを見る機会を先生が作ってくれました。みんなで号泣しながら見ました。なかなか涙が止まらなかったです。私は看護学生のあまりにも素直でまっすぐなメッセージに心を洗われ、怒っても仕方ないと思えるようになりました。そして、なぜか無理はやめようと思うようになりました。『できなくてあたりまえ、だから、学びに来てるんだ！！』そう自分自身に言い聞かせ、やれることをできる範囲で一所懸命やり、ため息はつかないようになった。課題や研究は大変ですが、前向きに取り組むようにしています。３人で支え合い、励まし合いながら前に進んでいます。

Zoomの授業中には、犬が吠えたり、荷物が届いたり、学校の授業では体験できないことが起きます。いきなりゴソゴソ音がしたかと思うと、後ろを横切る黒い物体。えっ、何？よくよく見ると、とってもかわいいフェレットの“うにちゃん“。COVID-19の流行で、医療だけでなく様々なことに対して変化が求められています。私はZoom授業しか行っていないため比較することはできませんが、何かしらの不足はあるかもしれません。それでも、私は十分学べていると思っています。会えなくても学びの共有はできており、助け合えてもいます。そして、初めて会っても、全く違和感なく打ち解けられました。だから、何とでもなるんだと何事にも柔軟に対応していこうと思っています。ただ、思ったより小さかっただけで。

修士課程１年　看護実践開発学領域　神山（カミヤマ） 明子（アキコ）

初対面後、大学近くのパン屋で会話を弾ませた2020看護実践開発学領域の３名

うにちゃん

“科学的思考”を取り入れた感染制御への探求

私は現在、病院のなかで医療関連感染を起こさないためにICTメンバーの一員として感染管理活動を行っていますが、自分の中で不明確なことがありました。それは知り得たデータを適切に評価ができていないことです。感染対策のガイドラインや論文を読むことはありましたが、内容を自施設へ取り入れて良いか不安と疑問がありました。また、自分自身で研究を行っていましたが、研究方法にも限界を感じていました。このような思いから、今以上に知識幅を広めたいと思い当大学院の門を叩きました。

大学院での研究活動で印象深かったことは、実際の医療現場を模倣した微生物実験を行い評価できたことで、当大学院での研究の特徴だと思います。また、多くの学会で発表することが出来た為、様々な分野の研究者とディスカッションすることで、異なる視点からの考えやアドバイスを得ることで研究の考察を深堀できたこと、さらに研究内容をアウトプットする力も身に着けることができたと実感しました。

私は修士課程で行ってきた研究テーマについて、さらに研究を進めて成果を成し遂げたいと思い博士課程へ進学しました。博士課程への進学はハードルが高いだろうし不安もありましたが、修士課程から担当していただいた岩澤篤郎教授と松村有里子准教授には修士課程からずっとフォローしてくださっていたので、迷いはありませんでした。

仕事をしながらの大学院への進学は決して容易ではありませんが、日々の実践から理論に立ち返った時に得られた発見と感動はそれ以上の価値があり、職場への還元も期待できます。

大学院への進学を少しでも考えている方は是非、一度大学院へ足を運んでみてはいかがでしょうか。未来の研究者をお待ちしています！

博士課程２年　感染制御学領域　片渕（カタフチ） 盛将（シゲマサ）

大学院修了パーティーの際に、木村哲学長（後列中央）を囲んで感染制御学の先生と仲間たち。本人前列中央

コロナ禍における助産実習

「助産学生さん、出産の時にずっと傍にいて介助をしてくれてありがとうございました。とても心強かったです。この子が生まれた時に一緒にいてくれたこと、忘れないです」

これは、2020年の夏、助産学生が分娩介助をしたお母様から頂いた言葉です。その言葉を聞いた学生の目には涙が溢れ、指導教員ももらい泣きです。心に染み入る助産実習のひとコマでした。

助産師になるために助産学生は実際に分娩介助をすることが課せられ、臨地実習に行く前には、大学において分娩介助用の人形（ファントーム）を用いて繰り返し分娩介助の練習を行い、技術試験に合格したのちに実習に出ることが許可されます。

しかし、2020年４月に入学した助産学生はCOVID-19の影響を受け、当初よりオンラインでの講義を余儀なくされ、対面での学内演習が無くなりました。分娩介助技術をオンラインで伝えることは難しく、ましてやそれを学習することは至難の業です。そのため教員が考えた工夫は、①骨盤と胎児のミニ模型や分娩時に用いる物品の見本（注射針など危険な物品を除く）などを学生１人１人に郵送②分娩介助の映像学習③分娩介助手順書を１日１回以上は目を通し介助のイメージトレーニングをする計画を立てました。

対面式が可能となり学内演習が開始されても、COVID-19の環境下では例年と同じような演習時間の確保は困難です。しかし学生の習熟度の速さに教員は驚きました。動画を見慣れている現代の学生たちは映像学習に慣れ、思っていた以上に分娩介助の方法を学んでいました。

COVID-19により助産学生の演習方法や実際の臨地実習の在り方、そして分娩時の風景も大きく変わり、特に首都圏の施設では里帰り出産が不可、夫・パートナーの立ち会い出産が不可になりました。もちろん、助産師、医師はいますが、産婦さんは１人でお産まで過ごすことを余儀なくされました。その状況の中、学生は、分娩介助に承諾して下さった産婦さんを担当し、共にお産を迎えたいと希望する産婦さんの気持ちに必死で寄り添い、分娩介助に取り組んでいきました。

そして母となった女性から、実習の最後に頂いた言葉が冒頭に書いた言葉でした。大学に行けない、対面での講義・演習が少ない、実習が行われるか否か心配、自己の技術習熟へ焦り、さまざまな不安要素を抱えながらのコロナ禍における助産実習は展開されています。

しかしその先にある、お母様方からの温かい言葉と、可愛い赤ちゃん達に心を癒され、未来を想像し、コロナ禍においてもまた助産実習を頑張ろう、頼れる助産師になろうと学生たちは前に進んでいます。

母性看護学・助産学領域
准教授　平出（ひらで） 美栄子（みえこ）

オンラインを使った学内演習

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の体験からの学び

私たち高度実践看護コースの19名にとって、2020年はまさに激動の一年でした。テレビでCOVID-19の情報が流れ始めた２月上旬頃、『5月からは実習も始まるというのに、無事に２年目を乗り切れるだろうか。』と、その時点では何処か他人事のように感じていました。４月には緊急事態宣言が出され、５月から半年間の予定であった実習は延期となりました。それでも私たちはネットTVによる医療面接や診察手技の自己学習等、自分たちが出来る事を実施し、実習の準備をしていました。６月中旬、実習開始が決定し、７月６日、予定より２か月遅れの実習が開始となりました。

しかし、実習後僅か２週間余りの７月下旬、私はCOVID-19に感染しました。週末に咳、発熱を認め、万が一の事を考えて実習を休んで病院を受診し、PCR検査を受けました。医師からの電話で「PCR検査が陽性でした」と言われた瞬間は、文字通り頭の中が真っ白になりました。直ぐに教員へ報告し、発熱前の２日間の『行動履歴報告書』を作成し、教員を通じて保健所や実習先の病院へ報告しました。その夜に保健所から緊急入院を指示され、個室に隔離入院となりました。40℃前後の発熱が１週間以上続き、日々、体力と体重が減っていくのが分かりました。『いったいいつまで続くのだろうか』と、心身ともに疲労のピークでした。

そんな私を支えてくれたのは、先輩NPや１年間一緒に勉強した同期、大学院の先生方でした。先輩NPは「絶対大丈夫、実習も何とかなるから。焦らないで治して」と毎日のように連絡をくれ、励ましてくれました。同期からも大学院の事、実習の事等、私が気にかけている事を逐一報告してくれました。入院中はずっと『一人』で自分だけ時間が止まったような状況でしたが、先輩NPや同期のお陰で、本当の意味での『独り』になる事は有りませんでした。改めて精神的・社会的苦痛に対するケアの重要性を学びました。治療を担当して頂いた医療チームの皆さんには心から感謝申し上げます。今の自分の命があるのも皆さんのお蔭です。

また、大学院の先生方には、退院後も以前のように実習が出来るように環境を整えて頂きました。スケジュール調整や実習病院関係者への挨拶等、多大なる配慮をして頂いた事と思います。実習再開後は特にCOVID-19で入院した影響を受ける事なく、学びの多い充実した実習をする事が出来ました。多くの関係者のご指導・ご協力があってこそと深謝しても仕切れません。

看護師のコロナ患者に対応する難しさも経験しました。点滴のルートを取るために訪室した看護師は、全身が覆われた防護服を着ていました。真夏に防護服を着て汗だくになりながら、何とかルートが確保でき、「時間がかかってすいませんでした」と申し訳なさそうに謝罪してきました。その姿を見たとき、テレビでは絶対に伝わらない最前線で働く看護師の大変さ、辛さを実感すると共に、看護の重要性を再認識しました。

１月には再び緊急事態宣言が出され、医療崩壊の危機も叫ばれています。４月からはNPとして働く予定ですが、COVID-19患者に関わる事も少なくないと思います。COVID-19に感染した経験がある私だからこそ気付ける患者の苦痛があると思います。今回の患者体験を忘れる事なく、より良い患者へのケアに活かせるように今後も努めていきます。

修士課程２年　高度実践看護コース　深川（ふかがわ） 哲嗣（さとし）

助　産　学　専　攻　科

Zoomを活用した遠隔参加による母子支援クラスを開催

新型コロナウイルスの感染拡大により、入学式の中止、期間短縮による新入生オリエンテーション、遠隔授業による講義、少人数での対面による演習等の授業を終え、１ケ月遅れの実習開始となりました。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、昨年、実習受け入れ許可を頂いておりました実習先から、急遽、実習受け入れのお断りがありました施設もありましたが、新規実習施設を含む他の実習施設のご理解とご協力により、11月末までに21名の実習を無事終了することができました。

11月下旬には、「地域母子保健学」の授業の一環として、オランダ・フィンランドで看護師・助産師として活躍されるお二人の方のZoomによる講演会を実施しました。新型コロナウイル感染拡大のなか、海外での看護師・助産師の現状をオンラインでご講演いただくことで、諸外国における母子保健活動の実際を学ぶことができ、将来、国際的な活動に興味を持っている学生はもちろんのこと、専攻科生にとって大変有意義な講義となりました。

さらに、11月下旬～12月下旬にて母子支援クラスを３日間開催致しました。今年度は対面ではなくZoomを利用した遠隔参加による開催として企画し、産後１～２か月、３～４か月の母子を対象としたクラスを計３回実施しました。参加した母親からは、コロナの影響でこのような集団クラスに参加できず、家で一人、育児をしていたが、他の母親の様子が分かってよかった、自宅から参加できることで、授乳やおむつ替えもすぐできるので参加しやすかったという感想が聞かれました。リモートでの集団教育は初めての試みでしたが、参加者の様子や反応をどのように捉えるか、画面の設定や評価方法に関しても検討を重ねたことで、知識の伝達だけではなく、母児の様子を捉えた双方向型のクラス開催が可能であると考えます。このようなクラスをぜひ今後も開催して欲しいという要望も聞かれ、学生の集団教育の学習と共に、地域の母子への貢献という意味でも今後も継続していきたいと考えています。

１月７日に２回目の緊急事態宣言が発出され、現在は、１年間の勉学の集大成として、遠隔授業による助産学研究の研究発表や国家試験対策講義等、日々勉学に勤しんでおります。

国家試験終了後は、受胎調節実地指導員の資格認定のための講義演習、新生児蘇生（Ａコース）の講習会を開催予定です。

教授　米山 万里枝（よねやま まりえ）
講師　島田 祥子（しまだ しょうこ）

リモートでの母子支援クラス風景

産後ケア研究センター開設４年目を迎えて

2016年６月より品川区との官学連携事業として産後ケア事業が開始され、2018年４月、更なる事業拡大に伴い本学産後ケア研究センターが開設され４年目を迎えました。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、１月７日に緊急事態宣言再発令されましたが、今回は、日帰り型、訪問型におきましては利用者様からのご依頼があれば実施し、電話相談は通常通り受付をしております。昨年のコロナ禍における産後うつ得点が高い利用者の割合も、通常時期と比較すると約２倍となっており、在宅勤務の増加に伴い、DVや虐待に関する報告もある事より、そのニーズは高まっているといえます。

電話相談では入院期間の短縮などにより、授乳相談、赤ちゃんの成長についての相談（育児相談含）・乳房トラブルケア等の相談が最も多くなっております。

今後も区との連携を図りながら継続支援を実施し、利用者のニーズに応えるべく、質の保証された良いケアを実施し、問題解決ができるように事業を運営していきたいと思います。

教授　米山 万里枝（よねやま まりえ）
講師　島田 祥子（しまだ しょうこ）

実績報告

	日帰り型／稼働率	訪問型（件）	電話相談（件）
2018年度実績	259件／96.3%	304件	315件
2019年度実績	304件／100%	333件	556件
2020年度実績	153件／54.8%	112件	867件

※2020年度実績は2020年４月～2021年２月まで。

感染制御学教育研究センターのご紹介

感染制御学教育研究センターは2012年開設されました（当時は感染制御学研究センター）。開設当初の活動は、感染制御実践看護学講座（本学2010年から開講）の修了生の希望者に、定期的なセミナーと実践のサポートを行うことが主でした。その後、センター事業の再整理が行われ、現在は「感染制御実践看護学講座（センター開設時は大学院に組み込まれていた）」「感染制学御企業人支援実践講座」そして「医療関連感染誌の発行」の３事業を柱に運営されています。

ひとつ目の感染制御実践看護学講座は、その修了生には「感染制御実践看護師」の資格（診療報酬の施設基準）を授与し、2020年現在まで約200名が全国の医療機関で実務に就いています。現在、予想もしなかった新型コロナウイルス感染症のパンデミックに見舞われている中、本講座の修了生の中には発生したクラスター対応に奔走した者もいれば、地域支援の中核となり活動している者もいます。いずれの修了生も感染制御の専門職として、自施設の最前線で重い責任を背負いながら日夜業務を遂行しています。

ふたつ目の感染制学御企業人支援実践講座は、感染制御に関連する企業の社員を対象としたユニークな講座で2013年に開講しました。目的は、企業人が医療機器を開発しあるいは医療機関を訪問するにあたり、医療関連感染症制御に関する基本的知識・技術を身に着ける必要があること、さらに、本講座を通して企業とセンターの連携を強化し産学連携の基盤を形成することなどとしています。

三つ目の柱は、年２回発行している「医療関連感染誌」の編集と発行である（Webのみ http://www.thcu.ac.jp/research/journal/）。本誌は感染制御の専門学術誌として学内学外問わず投稿することができます。

最後に、感染制御学教育研究センターで実施している３つの事業を紹介した。このようにセンターは感染制御に関わる実践的かつ即戦力な人材育成に重きを置いています。現在新型コロナウイルス感染症の脅威の中、改めて感染症対策に携わる専門家の育成が注目されています。まさに当センターで育成される人材は感染症と戦う医療そして社会を支える専門職そのものであり、今後も社会の要請に応えていきたいと思います。

感染制御学教育研究センター　教授　菅原（すがわら） えりさ

「感染制御実践看護師」認定証と認定バッヂ

放射線看護研修センター

昨年度に続き、認定試験今年度も100%合格!!

がん放射線療法看護認定看護師養成課程では、昨年度の修了生である２期生10名が、COVID-19の影響で11月４日に延期して実施された日本看護協会認定審査試験に挑みました。例年５月に行われていた本試験でしたが、各自病院勤務で翻弄されながらの学習を継続することは、至難の業だったと思います。そして、去る12月24日、認定審査試験の結果が発表されました。なんと、全員揃って合格という大変嬉しいニュース、最高のクリスマスプレゼントとなりました。何よりも、お忙しい中、貴重なご教授にご尽力頂きました本学大学の先生方をはじめ、多くの施設の先生方に感謝申し上げ、ここにご報告させて頂きます。

Zoomのリモート授業で体験型学習も!!

今年度は３期生８名を迎え、COVID-19の勢いが収まらない最中、対面授業が叶わないため、学びを止めない取り組みとして、Zoomによる授業を毎週末（金・土）継続して参りました。写真は、今年度最後12月末の座学授業の一場面です。講師の工夫により、おやつを各自持参し、実際の摂食・嚥下の流れを自分で体験しながらの学習風景。また、藤島式嚥下体操を教えて頂き、画面の前で実際に体操を実践したりと楽しい授業でした。既に全科目筆記試験は終了し、１月下旬から厳しい臨地実習に突入しています。研修生は毎日実習の中で自分と戦い、修了に向けて取り組んでおります。

放射線看護研修センター　がん放射線療法看護認定看護師養成課程
センター長　大島　久二
主任教員　　三上　恵子

学　長 × 同窓会長

— Special Talk —

東京医療保健大学の現代社会における位置づけと卒業生へのメッセージ

複数分野の医療職を養成し、国内最大数の看護師養成大学となった東京医療保健大学の社会における位置づけは何か。

木村：令和3年度卒業生を輩出すると、一大学当たりの卒業時看護師輩出数は群を抜いて日本最大となります。また、医療栄養学科、医療情報学科の卒業生も、医療施設のみならず、様々な分野の企業等に就職している状況にあり、東京医療保健大学卒業生の日本全体の医療保健分野における影響力が年と共に大きくなります。その影響力について、自覚と責任感を持ってほしいと思っています。

淺香：私が卒業をしてから、新たに3学部が設置され医療界のみならず、社会にて同窓生に遭遇する機会が増えたことに大学の成長を感じ、卒業生として大変誇らしく思っております。学生に対する教育について心掛けていることはありますでしょうか。

木村：東京医療保健大学は、「いのち」「思いやり」「絆」「愛」を尊重する心を持った医療人を育成するために誕生し、先般、建学の精神に則り、社会の期待に応え続けていくことを目指し「東京医療保健大学ビジョン」を定めました。
医療が高度化すると共に、ニーズとして求められるのは、チーム医療の中で大切な高い専門性と患者さんを思う温かい心だと思います。本学はその両者を兼ね備え、多様な患者さんの人生観や価値観を尊重できる医療人を育成をしていきたいと心掛けてきました。

淺香：「東京医療保健大学ビジョン」を拝見し、一歩先の医療を創造し、明るい未来の社会を実現するという目標に、更なる飛躍の可能性を感じたところです。卒業生の社会においての役割について、願うところをお聞かせいただけますでしょうか。

木村：医療人としてチーム医療のけん引役となり、患者さんの心を理解し、科学に基づいた平等な医療を心掛け、日本の医療をリードしていってほしいと思っています。

医療の高度化が進む中で、生涯学習について同窓会の関わりも含め、見解をいただきたい。

木村：医学・医療は常に進歩・進化しています。是非、卒業生には、その動きに敏感になり、医療の質を高める努力を継続して欲しいと思っています。継続的な生涯学習は、新しい知識・技術、考え方等を吸収するにあたり非常に重要だと思っており、同窓会も是非、各種情報発信を担っていただければありがたいです。

淺香：同窓生からも生涯学習の機会提供の声をいただいており、今後の活動の必要性を感じていました。現在、既に大学で提供している生涯学習はありますでしょうか。

木村：本学では、特色ある複数の大学院を設置しており、社会で得た経験を基に更に学問を深め、再び社会に出て、地域の発展、課題解決に寄与できるよう協力ができればと思っております。
また、年間を通し複数回、各種テーマを設けて本学教員が講師を務める公開講座を実施しており、こちらは気軽に参加することが可能です。企画ごとに、大学ホームページ等で開催周知をしております。

淺香：大学院はハードルが高くても、気軽に参加できる公開講座もあるということで生涯学習のきっかけになると感じました。今後、大学と同窓会で共同開催できる学習機会は設けられるでしょうか。

木村：是非、時宜を得たテーマで講演会や研修会を様々な分野で活躍されている卒業生も講師として参加の開催はできないでしょうか。このような取り組みも単発ではなく、大学と卒業生の一体感の醸成の為にも是非、継続して実施していけるような関係性でありたいと思います。

〈卒業生へのメッセージ〉

大学を卒業してもなお、東京医療保健大学は卒業生の身近にありたいと思っております。困ったときは遠慮なくいつでも大学や同窓会に連絡し、相談してください。卒業生の皆さんの益々の活躍を祈念しております。

＜同窓会 会長挨拶＞

本号では、任期満了で退任となる木村学長との対談を掲載させていただきました。掲載スペースの都合からやむを得ず、一部割愛のダイジェスト版となりました。完全版を大学HPにて掲載予定ですので、掲載の折は是非ご一読いただければと存じます。本年は、各種同窓会事業も開催を見合わせる等、難しい1年となりましたが、ICTツールの普及、発展を受け、今後の同窓会の新しい形にも挑戦する希望が見えてまいりました。学長先生よりいただいた助言等も踏まえ、精進してまいります。今後ともご支援方よろしくお願い申し上げます。

東京医療保健大学同窓会第3代会長　淺香 樹

東京医療保健大学学報 第31号
THCU Chronicle No.31
令和3年3月24日発行
Spring 2021 Tokyo Healthcare University 4-1-17 Higashigotanda, Shinagawa-ku, Tokyo, Japan
発行／東京医療保健大学 東京都品川区東五反田4-1-17
【URL】http://www.thcu.ac.jp
【E-mail】info@thcu.ac.jp

トピックス Topics

情報教育研究センターの運営について

情報教育研究センターは、資格試験や検定試験に関する幅広いサポートを行っている他、在学生に向けたイベントを企画、開催しております。

昨年12月には医療情報学科学生向けの特別イベントとして「リハ×テク体験会」を開催いたしました。感染症対策で講義や病院実習などが制限される中で、学生がヘルスケア現場の実情を学び、将来的なキャリア選択をイメージできるよう、オンデマンドによるバーチャル講義・バーチャル体験と、対面型の講演会を組み合わせた“ウィズコロナ”の社会情勢に沿った形式といたしました。

埼玉よりい病院の理学療法士　猪岡弘行先生と、デイサービスうちリハ深谷の理学療法士　真下和貴先生、本学卒業生でsilvereye株式会社の島香菜美様にご協力いただき、臨床現場、デイサービス施設、リハビリ機器開発の観点から、リハビリテーション現場の実情と情報テクノロジーの関連についての講義を動画にて配信し、更に講演会では、猪岡弘行先生によるご講演とリハビリ機器の体験を行いました。コロナ禍で発展すべきテクノロジーや病院内での感染症対策の方法など、タイムリーな内容も多く、参加した学生にとっても大変良い機会となりました。

また、本イベント開催に伴い、情報教育研究センターの特設WEBサイトを開設いたしました。サイト内では、本イベントでの動画配信、資格試験・検定試験についての案内や解説など、文書や動画形式にて公開しております。今後も学習や資格取得に関する動画コンテンツなどを掲載し、在学生はもちろん、医療情報学科を志望する高校生が大学生活をイメージできるようなサイトへと活用の幅を広げていく予定です。

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、逆境の中ではありますが、新年度に向け、資格取得の意義や重要性を改めて周知し、在学生に寄り添った受験支援や学習へのサポートを引き続き行ってまいります。

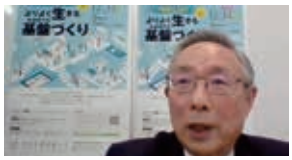
東京医療保健大学 総合研究所 本格始動へ キックオフシンポジウム開催

建学の精神に基づいた「先進的な研究の推進」の実働のため、学内の横断的研究や産学連携の環境基盤作りを目的として総合研究所を本格始動することとなり、キックオフシンポジウムを開催しました。テーマは、『「よりよく生きる」を追求する基盤づくり』として、共同研究を進めているTIS株式会社／Tスクエアソリューションズ株式会社と共催しました。

木村所長（学長）による開会挨拶に引き続き、京都大学・石見拓教授による「健康・医療・介護に関わる個人データとWell-Being」に関する講演を行いまいた。個人健康情報記録（Personal Health Record）を用いて、いかに日常生活の身体や生活の様子を記録し、Well-beingに役立てるという観点で、大学や地域で実施されている研究や取り組みについて紹介されました。

特別講演に引き続いて、シンポジウムの部として、共催および関連の会社より、情報関連産業、製薬、新規事業の企業としての取り組み、本学からは、大学院医療保健学研究科・米山教授より、大学院教育と連携した産後ケアに関する取り組みについて講演がありました。その後、総合討論として、「よりよく生きる」をどのように捉えるか、産学連携によるブレイクスルーの可能性などについて意見交換をしました。参加申込者は168名で、アンケートの結果からも、総合研究所、Well-being研究への期待、多様なテーマ・アプローチの可能性を見出しました。今後は、組織体制を整えるとともに、勉強会や講演会などの種々の機会を提供することで、学内外の共同研究、産学連携による研究費取得などを強化していく予定です。

研究協力部



編集後記 Editor's note

令和２年度は、新型コロナウイルスの流行により授業をはじめイベント等の実施に制限が多い時期が続きましたが、「新しい生活様式」を取り入れ、ICTを活用した新しい取組みが次々と開始されるなど改革の年にもなりました。今年３月末で木村学長先生はご退任となりますが、次年度も新学長の下、変化に対応した取組みを推進してまいりたいと思います。

(Y)